

図書ニュース

第 1 号

大阪府立北野高等学校図書館 2010.4.23 発行

新学期——それぞれがさまざまな抱負を胸に、新たなスタートをきったことと思う。勉強のこと、クラブのこと、さまざまな抱負がある中で、高校生ならばその一項目に「読書」が入っていてほしい。今年はこんな本を読んでやろう、あんな本にも挑戦してみよう、そんな知的好奇心にあふれた北野生であってほしい。

最近の学生は本を読まなくなった、と言われて久しいが、案外読書好きの生徒も多いように思う。しかし、読んでいる本はやはりライトノベル関係が多いし、本校図書館の貸し出し冊数1、2位も、伊坂幸太郎、東野圭吾である。趣味の読書としては、それはそれでいいと思うし、私もこの二人は好きでわりと読むが、こと大学受験を視野に入れて考えた場合、読書の質としてやはり不十分といえるだろう。

今年の大学入試国語問題を見渡してみても、哲学者・思想家と呼ばれる人の文章が圧倒的に多い。例えば、上田閑照「宗教とは何か？」(京大)、柄谷行人「ネーションと美学」、村田純一『『わたし』を探検する』(阪大)、黒宮一太「ネーションとの再会」(九州大)、入不二基義「足の裏に影はあるか？ないか？」(名古屋大)、市野川容孝「思考のフロンティア 身体／生命」(東北大)、小林道夫「科学の世界と心の哲学」(金沢大)、大澤真幸「不可能性の時代」(静岡大)、吉澤夏子「人間の社会にとって家族は必然か？」(神戸大)、丸山真男「人間と政治」(大市大) などなど。いずれも人間や社会のあり方を根底的に考察しようとした文章である。こうした文章を読みこなすには、やはり東野圭吾、伊坂幸太郎レベルの文章を読んでいるだけではだめなのだ。ではどうすればいいか？——簡単なことである。こうした文章を日ごろから読み慣れることである。「**習うより慣れよ**」——これはあらゆる「学び」の王道である。

ところで、大学入試ではなぜこのような哲学的・思想的な文章が多く出題されるのか？それは、人間や社会の諸問題について深く考えようとする、知的探究心旺盛な学生を大学側が求めているということなのである。逆に言うと、そういうことに関心のない学生は来てほしくないということだ。なぜって、大学というのは、社交場でもスポーツクラブでもなく、「知的探求」の場であるからだ。人間社会のさまざまな問題について、自分の頭で深く考える力を持った学生を選別する——それが大学入試の目的だ。であるなら、大学を目指そうとする諸君も、そうした力を養うために、多少難解と思われるような書物にも挑戦し、読みこなす訓練を日ごろから積む必要があるだろう。

というわけで今回は、入試問題によく登場するような哲学的・思想的な内容の本をいくつか紹介したい。

[書名の後の記号は、本校図書館の図書番号です。]

◎内田樹「寝ながら学べる構造主義」(文春新書) [116-U1-1]

入試評論文の読解には、現代思想の基本的な考え方についての理解がどうしても必要だ。ニュートンやアインシュタインの考えを知らないで、現代科学が理解できないように、フロイトやマルクスやニーチェの考えを知らないで、哲学的思想的評論を読みこなすことは難しい。本書はそうした現代思想の格好の「チャート」となってくれるだろう。哲学的な内容の本にしてはきわめて読みやすく、ユーモラスな表現も随所にあり、文字通り「寝ながら」気楽に読めるような本だ。読み終えたときには、きみもいっぴしの「現代思想通」になっているだろう。

著者の近著で、ベストセラーにもなっている「日本辺境論」(新潮新書) [114-U1-1] も、おすすめ。「日本とはどういう国か」、「日本文化とは何か」を考える際の、さまざまなヒントを提供してくれるだろう。「日本文化論」、「比較文化論」なども、入試に頻出するテーマだ。

◎ベネディクト・アンダーソン「想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行」(NTT出版) [311-A3-1]

「ネーション」「国民国家」というのも、入試評論のキーワードの一つである。急速にグローバル化する世界の中で、多発する民族紛争やテロ事件——そうした状況にあって、「国家とか何か」「民族とは何か」ということがきわめて重要な現代的課題となっているのだ。そうした問題を考える際に、本書ははずせない。「国民国家」とは近代の産物であり、心の中にイメージされた「想像の共同体」にすぎない、という考えを打ち出したのが本書であり、今や現代思想の古典とっていいだろう。

近著「ヤシガラ碗の外へ」(NTT出版) [223-A1-1] は、東南アジア研究者としての著者の自伝であり、どのようにして自分の考えを深め発展させていったかを、何年間にもわたる東南アジアへのフィールドワーク体験をふまえて語っている。欧米の大学システム、学問研究のあり方などを知る上でも大いに参考になるだろう。「ヤシガラ碗の下のカエル」というのは、日本の「井の中の蛙」に似た東南アジアのことわざだが、「学問」をするにあたっては、今いる狭い世界から外へ飛び出していこうとする、知的冒険精神こそが大切なのだというメッセージが表題にこめられている。

◎田中克彦「ことばと国家」(岩波新書) [801-T5-2]

「国民国家」の問題と「ことば」の問題は切り離せない。日本は一民族一言語国家だといわれる。同じ言葉を話す同じ民族だから同じ国民なのだと単純に信じてはいまいか。しかし、大阪弁と青森弁と沖縄弁とは果たして同じ「日本語」といえるだろうか。土地の人々の話す言葉をわれわれはほとんど理解できない。では、何をもって「日本語」というのか。「国語」という概念もまた、「近代」によって作り出されたひとつの「神話」なのではないか。本書は、そうした「国家」と「言語」の問題を論じた好著として定評がある。文章は平明かつ明晰でしかも含蓄があり、入試問題にもしばしば使われている。

◎丸山圭三郎「言葉とは何か」(ちくま学芸文庫)

言語の問題を語るとき、ソシュールの名を抜きには語れない。ソシュールの考えを知らないで言語関係の評論を理解しようとするのは、ピタゴラスの定理を知らないで数学の問題を解こうとするようなものだ。ソシュールの人文科学史上に果たした役割は、自然科学におけるコペルニクスやニュートンの発見にも比せられる。(それを、哲学の「言語論的転回」といったりもする。)それほどまでにソシュールの思想は、言語学という一分野をこえて、現代思想全般に多大な影響を及ぼした。本書は、そのソシュール研究家として著名な著者の言語学入門書である。「言葉はものの名前ではない。言葉こそが世界を構成する。」という現代言語学の知見を、平易な語り口で、わかりやすく解き明かしてくれている。ソシュールの思想および言語学に関心を持つ人のまっさきに読むべき一冊であろう。

図書館所蔵の本では、「ソシュールを読む」(岩波セミナーブックス) **080-I1-102**がある。

「言葉」の問題もまた入試に頻出するテーマであり、現代思想を理解する上でのキーになる部分でもあるので、ぜひ理解を深めておきたい。

◎レヴィ＝ストロース「悲しき熱帯」(中公クラシックス) **382-L1-1~2**

著者もまた、現代思想を語る上で欠かせない存在だ。フランスの文化人類学者、思想家であるが、昨年の11月100歳で亡くなった。各種ニュースで大きく報じられたので、記憶にある人も多いだろう。本書は、ブラジルでの人類学調査の記録をまとめた紀行文であるが、その「未開社会」についての優れた分析とヨーロッパ中心主義への批判は、現代思想に大きなインパクトをもたらした。氏の代表作であるだけでなく、20世紀を代表する歴史的名著といえよう。今、インディオやアボリジニなど少数民族の世界観や思考法が再評価されたりしているのも、レヴィ＝ストロースらの仕事があつてこそといえるだろう。

レヴィ＝ストロース入門書も数多く出ているが、図書館所蔵の本では、渡辺公三「レヴィ＝ストロース」(「現代思想の冒険者たち」第20巻) **133-G1-1-20**がある。

◎鷺田清一「わかりやすいはわかりにくい?——臨床哲学講座」(ちくま新書)

現代哲学の知見をもとに、ファッションや介護などの身近な問題に斬新な視点を提供してきた著者だが、大阪大学の学長に就任して以来、多忙のためか、めばしい著作がない。本書もNHKでの講座をまとめただけの内容であり新味はないが、今まで数々の著作で展開してきた著者の思想がコンパクトにわかりやすく語られている。これ一冊読めば、「鷺田哲学」の全体像を概観できるだろう。入試問題に最も多く登場する著者だけに、受験生必読の書といえよう。

他に、「新編普通をだれも教えてくれない」(ちくま学芸文庫)、「死なないでいる理由」(角川書店) **914-W5-2**、「哲学個人授業」(パジリコ) **104-W2-5** [永江朗との共著] など。

哲学書片手に孤独な思索にふけるといったタイプの学生は、もはや「絶滅危惧種」といっていいだろうが、鷺田清一の著作くらいは高校生のうちに読んでおきたい。

◎永井均「マンガは哲学する」(講談社) **726-N5-1**、(岩波現代文庫)

手塚治虫、赤塚不二夫、萩尾望都など24の名作マンガを、言語ゲーム、自我論などの現代哲学の観点から読み解いていく、ユニークな現代哲学入門書。哲学的思考法の基本を楽しく学ぶことができるし、日本マンガの奥深さに驚くことにもなるだろう。昨年、本書の「ドラえもん」を論じた箇所が、大阪大学の入試に出題された。受験してきた生徒に聞くと、チンプンカンプンでまったく解けなかったと言っていたが、やはりこうした哲学的文章に日ごろから触れていない人は読み解くのに苦労するだろう。

著者は哲学入門書的な著作を多く出しているが、他に「**転校生とブラックジャック**」(岩波現代文庫)、「**これがニーチェだ**」(講談社現代新書) **134-N6-1**などがある。

◎入不二基義「哲学の誤読——入試現代文で哲学する！」(ちくま新書)

著者は元駿台予備校で英語講師をしていた経験もある哲学者。本書は、大学入試に出題された哲学者の文章を取り上げ、それを徹底的に精読しようとする試みである。取り上げられるのは4題で、永井均、野矢茂樹、中島義道、大森荘蔵の文章。(いずれも入試にしばしば登場する哲学者たちだ。)本書をしっかりと読めば、哲学的文章の読み方といったものが会得できるはずだし、さらに「入試問題を見切る」高度な視点を手に入れられるかもしれない。「現代文の受験参考書」と「哲学入門書」の「橋渡し」をするような一冊である。

著者の近著「**足の裏に影はあるか？ないか？——哲学随想**」(朝日出版社)は、今年名古屋大学はじめいくつかの大学入試で出題された。

その他、哲学入門書的な本は、星の数ほど出版されているが、比較的手軽に読めそうな本では、竹田青嗣「**哲学って何だ**」(岩波ジュニア新書) **104-T6-1**、長谷川宏「**高校生のための哲学入門**」(ちくま新書)などがある。

入試現代文といったってしょせん日本語だし、まあ何とかなるだろう、予備校で解法のテクニックみたいなものを習えばそのうち解けるようになるだろう、などと安易に考えてはいないだろうか？——それが何ともならないのだ、これが。特に、君たちが目指そうとする難関大学といわれるところの入試問題は、そんな小手先だけの受験テクニックでどうにかなるようなしろものではない。表面的な知識ではなく、内容の本質的な理解が求められる。物事の本質を自分の頭でしっかり考え抜く、そうした力がないと歯が立たないような問題が出題されるのだ。

哲学的思想的文章はそうした力を養う格好の素材である。

ぜひともこの一年の読書計画に、上記のような書物を加えておいてほしい。